研究ノート

ケネディ内閣の研究

――ゴールドバーグ労働長官――

清水良三

目次

序文
一　AFL・CIOからの反対
二　入閣
三　リリアン・ハーシュタインの影響
四　労働組合担当弁護士開業
五　第二次大戦中の活動
六　労働問題の法律家としての名声
七　団体交渉における直観と洞察
八　AFL・CIOの合同を実現
九　労働界の恐喝事件
十　マクレラン委員会との関係
十一　夫人素描―考古学的絵画―
十二　大統領直属の労使諮問委員会

序文

ケネディ大統領はアメリカが生んだ近代稀有の巨星であって、硬性憲法の制限下にあって大統領職を最大限に活用

して建国以来のアメリカの理想を追求した。そのため、眠っていたアメリカ的理念は、国内政治・国際政治の各分野で突然眼覚めさせられ、怠惰な自己満足と消極的安穏に幸福感をむさぼっていた人たちは、メイフラワーから初めてアメリカの大地に足を降ろした時に、アメリカ人の祖先たちが感じた緊張感を感じた。不幸にしてケネディはこういう緊張感を嫌がる人たちによって暗殺されてしまったが、彼が呼び覚した清涼感は、いまも我々の脳裏にはっきりと残っている。この研究ノートは、ケネディのそうした政治性を、ケネディ内閣の閣僚たちの特徴の中に読みとろうとするものである。今回は、「契約のテーブルにおける騎士」といわれたアーサー・ゴールドバーグについての研究ノート抜萃である。参考書については国士館大学政経学会誌第七号をごらん下さい。

一　AFL・CIOからの反対

ケネディ内閣での地位につくためにアーサー・ゴールドバーグが労働運動の世界を去った時、彼は労働組合の歩調を交渉のテーブルのリズムに合わせるように変え、組合員の意見の対立や分裂を融解させ、労働組合から共産主義と腐敗の要素を一掃し労働組合を指導して複雑な議会の立法手続に順応せしめた人として、既に知られていた。労働界を悩ませた危機の期間を通じて、ゴールドバーグは彼が助力していた組合指導者たちの間の広汎な意見の相違を調整し、その橋渡しをすることができたのであった。CIO（産業別労働組合会議）のウオルター・ルーサーとAFL（米国労働総同盟）のジョージ・ミーニーが、労働組合員の二十年間の分裂を終らせる方法を探していた時、新しいAFL・CIO憲章によって両者を満足せしめる様式をつくりあげたのはゴールドバーグであった。この連合が家族

の恐喝という事態を処理しなければならなくなった時、連合役員の基本的行動様式をきめた倫理実践要項をすぐに書きあげたのも、ゴールドバーグであった。それから彼はこの恐喝を行なったものを、労働組合自身の査問会議およびマクレラン委員会に提訴する手続をとった。

労働運動においてあげたその業績にもかかわらず、ゴールドバーグは、労働者たちから組合の人とは看做されていなかった。彼がそれまでに持っていたことのある唯一の組合員証は、ホッド運搬人組合から発行されたものだけだった。当時彼は法律学校に通う資金を得るためにある建設会社で働いていたのであった。ゴールドバーグはジョージ・ミーニーと親しく十年間仕事をして来ていたが、そのジョージ・ミーニーにとってゴールドバーグは「立派な人物」であった。だがミーニーの基準からいけば、労働長官の地位には適当ではなかったのである。ケネディが閣内の労働長官たるべき人を決めなければならない時が来た時、ミーニーは彼にとって承諾できそうに思われる五人の人物の名前を乱暴に書きおろしたが、それは通信労働者組合の議長ジョゼフ・ビーアン、鉄道職員組合のジョージ・ハリソン議長、小売店員組合のジェイムズ・サフリッヂ議長、機械工組合のアル・J・ヘイズ議長および電気労働者組合の会計主任ジョゼフ・キーナンであった。強力な建設業者団体の指導者たちにとっては、このうちキーナンだけが承認できなかった。

ケネディがゴールドバーグを選ぶという意図を示した時、AFL・CIOの本部から反対の嵐がまきおこった。ゴールドバーグ自身はこの申出を最初拒絶した。彼は二十三年間弁護士として組合運動のために貢献して来た。労働組合運動ではなく、法律が彼の職業であった。そして彼はケネディ政府内でもその仕事を続けたいと希望し、できるならば司法長官として、また、それができないならば、副司法長官として働きたかったのである。「私は受けた教育か

ら言っても訓練から言っても、三十一年間の経験から言っても、現在法律家なのである。私は残りの人生を法律家としての仕事を続けて行きたいと思っている」と彼は言った。だが、組合の彼に対する反対が強まった時、ゴールドバーグの闘争的本能が呼び起された。彼は大統領選出候補に対し、「ジョージ・ミーニーが承認するならば」、労働長官の仕事を引き受けると語った。ミーニーはしぶしぶ承諾の返事をした。一九六〇年十二月の十五日の朝はやくミーニーは怒っている建設業者の幹部たちの会合に出席した。そして彼らに自分の決定を語り、反対しないよう説得した。同じ朝遅くなってから彼とゴールドバーグは、ケネディが彼の新労働長官の任命を発表するにあたって、ケネディのジョージタウンの家の階段に一緒に微笑しながら立っていた。

雑誌フォーチュンは労働組合の弁護士としてのゴールドバーグの、ワシントンでの長い経歴を上手に編集して掲載した。一九五〇年に同誌は合衆国鉄鋼労働者組合が会社側に恩給支払計画を承認させるにあたって、ゴールドバーグが交渉者としてまた法律顧問としてつくした努力に対して、彼に「本年度の労働界の最高の人物」という称号を与えた。一九六〇年までに彼の名声はたかまっていた。「ゴールドバーグは鉄鋼労働組合にとって機略に富んだ交渉者以上のものである。彼はまたアメリカ労働運動全体の無任所大臣であり、理論家であり、政策家であり、外交官であり、そして又非常に有用なワシントン政界との接触役である」と同雑誌は述べた。この間の十年に、ゴールドバーグは労働組合の幹部会議に出席しまた最高裁判所判事たちの友ともなり腹心の人ともなって彼らの前で組合関係の事件について巧みな理論を展開し、自国政府の役人のみならず外国政府の役人たちとも語り合い、議会の指導者たちと密接に交渉し、労働者の政治的支持の方向を、彼がこうあるべきだと思う方向に向けたのであった。一九六〇年の大統領選挙戦の最中、選挙運動の成果について絶えずケネディと電話で連絡し、またこの民主党の候補者に組合の支持が

得られるよう助力したのであった。彼は真面目な穏やかな作法の人であった。彼のやわらかな渋味のある声は、彼の生れ故郷であるシカゴ人の跡をなおとどめていた。彼の風彩はきちんとしていた。彼は念入りに秤を見つめるが、それは五フィート九インチの彼の背丈で目方が百七〇ポンドを越さないことをたしかめようとするためであった。彼は贅沢に仕立てられた服を着ていた。色彩は閣内での彼の地位を考えて、やや黒みがかった保守的な系統のものを着ていた。ゴールドバーグが語る時、彼の手はたえず動かされていた。そして強調をする時にはその手を突き出すのであった。ゴールドバーグが聴き手にまわっている時、彼は両手をすり合わせるが、それは関心を示すというより、むしろ彼が何か考えていることを示しているようであった。角ぶちの眼鏡によって彼の真剣そのものの表情はさらに強められた。そして時々彼は若々しい二十五年前の知性に満ちた法律学徒のように見えたのであった。

ゴールドバーグは公衆の面前で気楽に壇上の人となれたが、それは組合の大会や晩餐会や政治的集会やその他の会合での長年の経験の賜であった。彼は洗練された話し手ではないが、このころ次第に話が上手になって来ていた。一時彼は「あけぴろげの」冗談をいうことを軽蔑していた。すれっからした冗談を聞いてもゴールドバーグは微笑だにしなかった(一人の友人は〝そういう冗談は彼の頭上を通過してしまうようだ〟と言っている)。彼はユーモアのセンスで人に知られている訳ではない。そして彼の冗談の要点が時々友達にわからないことがあった。ゴールドバーグが一番の大笑いをするのは、人々が誤解によって馬鹿馬鹿しい状態にまきこまれるような、人間関係についての諧謔であった。

二　入　閣

労働長官の指名を受けたのち、ゴールドバーグが最初にやったことは、労働運動とのつながりを断ち切ることであった。それがはっきりと終ったのは一九六〇年十二月三十一日であった（一九六一年一月二十一日に上院労働委員会によって彼の任命が承認されるまで、彼は学校卒業後彼が働きはじめた二十歳の時以来、はじめて失業したのであった）。「これは労働運動との完全な最終的な別離である」と彼は言った。その後、彼は自分の事務所で次のように言った。「公共奉仕に時間を捧げるのは常に法律家の伝統の一部であった。多くの偉大な法律家たちはこのことをした。それから彼らは彼らが立ち去った職業に再びもどったのである。私は労働問題の業務に再びもどるつもりはない。私はこの点は明らかにしたいと思う。何故ならば労働長官に就任するという点から考えて、そうすることは妥当ではないと私が感じたからである。現在私は、私が今やっていることを終えたら、労働分野以外で、個人で弁護士業をやりたいと思う。」

ゴールドバーグは地位・職業などについてのすべての依頼者をことわった。そして彼の支配下にある財産、プエルト・リコ、サン・ジュアンのゴンダド・ビーチ・ホテルの株を含め、主として不動産を、全部売りはらった。彼はワシントンにある彼の法律事務所ゴールドバーグ・フェラーおよびブレドホフ事務所を辞職した。彼はこの事務所の先輩格の参加者であったのである。また彼はシカゴにあるゴールドバーグ・ディヴォー・シャダーおよびミクヴァ法律事務所からも手をひいた。ゴールドバーグが二万五千ドルの内閣の仕事を引き受けた時の彼の収入は、年十万ドルで

あったと噂されている。彼はまた合衆国鉄鋼労働者組合の恩給受領資格からも身をひいた。この計画からは彼もまた六〇歳になれば相当の収入を得ることになっていたのである。彼はまだいくつかの不動産所有権を持っていた。だが、それらをすべて信託してしまって、彼自身はその財産の販売・貸付あるいは購入、あるいはその他の用途方法についてまったく発言権を持たないようになっていた。

労働長官に任命された時、ゴールドバーグが同時に持っていた役職は、AFL・CIOの特別顧問弁護士、アメリカ鉄鋼労働者組合の弁護士、AFL・CIOの工業労働者組合所属の弁護士、CIO繊維労働者組合の特別顧問弁護士、国際婦人服労働者組合ワシントン駐在弁護士、紳士婦人用帽子製造工連合組合ワシントン駐在弁護士などであった。彼はまた必要に応じて輸送労働者組合、アメリカ新聞組合、ホテルおよび食堂労働者組合、統一教師連合および鉄道職員組合の代表者ともなったのである。彼は州郡および市の労働者のための実践倫理委員会のただ一人の委員であった。そして、また彼は共和国のための基金および「カーネギー国際平和財団」の理事の一人であった。

三　リリアン・ハーシュタインの影響

これだけの仕事をまさに一手に引受けて来ていたゴールドバーグは、一九〇八年八月八日に、八人の子供の末子としてシカゴにおいて生まれた。彼の両親ジョゼフおよびレベッカ・ゴールドバーグはロシア移民であった。彼はシカゴ・ウエスト・サイドの薄暗い地区で育てられた。彼の父親はそこで四輪馬車で品物を運んで、細々と生計を立てていたのである。生活は家族のための激しい闘争であった。特にアーサーが八つの時に父親が死んでしまってからはそ

うであった。寒い夜など家族は薪を燃すストーブで乱雑になっている台所で、暖をとりながら眠った。週給三ドル八〇セントでアーサーがはじめて仕事についたのは十二歳の時であって、彼の仕事は工場から店舗へ靴を運ぶことであった。第二番目の仕事は衣服商の包装係であったが、店主が彼に一週に一晩、夕食代としての追加手当僅かに五〇セントだけで、余分に働いてくれと要求した時、これを拒絶したために解雇された。彼はすぐ別の仕事を見つけた。

若いアーサーは真面目で熱心な、すぐれた学生であった。彼は四歳の時に自分で読めるようになった。幼稚園をとばして学校に入ったが、その後は彼のクラスでいつも一番年下であった。彼は十六歳の時にシカゴのハリソン高等学校を卒業し、その後、大部分の学生がほかに仕事を持ちながら通っている公立のクレイン短期大学に入った。そこでゴールドバーグは背が小さくて元気のよいリリアン・ハーシュタインという先生と知り合いになった。リリアン・ハーシュタインの担当する一年生の英語のクラスは午前九時にはじまった。ミス・ハーシュタインが教壇から生徒の机の列を見下ろすと、「アーサーの頭が急にあげられたかと思うと、また下がって行くのがよく眼にうつりました。そして彼はやがて眠りこんでしまうのでした」と彼女は回想している。彼女がその生徒に近ずいて行くと、彼は彼女に自分は病気ではないことをはっきり言ったが、郵便局で八時間働いた後、午前二時まで眠らなかったのだということも認めたのであった。

ゴールドバーグが労働運動にはじめて理解を持つようになったのは、このクレイン短期大学においてであり、リリアン・ハーシュタイン先生を通じてであった。彼女は労働運動に深い関心を持っていた。そして米国労働総同盟についての労働教育を教室においてしたのであった。当時彼女はシカゴ労働総同盟の執行部のただ一人の婦人役員であった。そして何回も農民労働者綱領作成のための政治局委員の候補に選ばれたのである。ミス・ハーシュタインの関心

と熱意は、彼女の生徒の上にまであふれ出て行ったのであった。そしてアーサーは当時の労働問題についての討議において積極的な役目をはたしたのであった。「アーサーの仲間の生徒たちの多くは、下層および中流の家の子弟で、書物や衣服を買うために、さらにはまた家族の予算を助けるために部分あるいは全時間働いている人たちでした」と彼女は回想している。「彼らははやくから社会的・経済的な諸問題と取りくんでいたのです」。だが、他の生徒たちが討論に感情的にまきこまれていずれかの派に加担していた時に「アーサーはいつも相手のいうことに耳を傾けていました」とミス・ハーシュタインは想出を述べている。

ゴールドバーグはクレインに三年間在学した後一九二六年にこの学校を卒業した。そしてノースウエスタン大学の法学部に入った。ノースウエスタン大学の入学課は、彼がその儘労働を続けて行っても勉強の妨げにはならないだろうということを確信して、彼を入学させたのである。「私は彼が椅子にかけたまま膝の上に法律書を載せ腕に眼ざまし時計をかかえて眠っている姿を思い出すことが出来ます」と、彼の姉の一人が語っている。「彼は眼ざまし時計を二時間たったら鳴るようにしておきました。そしてその時に眼をさまし、さらに勉強を続けるのでした。彼は本当に学問好きの人でした」。ノースウエスタン大学における三年間に、彼は八十九履習単位の成績をA、三履習単位の成績をBでとって、その学校最高の平均学業成績をおさめた。この記録はノースウエスタン大学で文字基準の成績表示方法が採用されていた期間において、誰も追い越すことが出来なかった成績である（一九三七年にこの大学の法学部は、数による成績表示法に変えた）。

ノースウエスタン大学に通っている時も、ゴールドバーグはカムフナー、ホルヴィッツ、ホーリガンおよびダニエルズの各法律事務所で部分時間の労働をした。彼は法学部の三年の終りの時に弁護士資格試験に合格した。それで学

部当局に対して、法律事務所で一日中働くことができるように、残り一年間の在学期間の授業放棄を許してくれるよう申請した。当時ゴールドバーグのようにアンダーグラデュエイトの勉強を三年間しかせずに、法学部に入って来た学生は、四年間この学部に在学することを要求されていたのである。学部当局はゴールドバーグが学校でいくつかの特別の修業をすること、そしてさらに二、三の履修単位を追加獲得するという条件のもとに、ゴールドバーグの要求を認めた。一九三〇年に彼は最高優等の成績で卒業し、法学士の学位を得たが、同時にクラス最高の生徒として、チャールズ・B・エルダー賞を得た。この最終学年の時にゴールドバーグはまた、イリノイ法律評論の編集員もしていたのである。

四　労働組合担当弁護士開業

法学士の学位を得たのちも、ゴールドバーグはカムフナー、ホルヴィッツ、ホーリガンおよびダニエルズ法律事務所でその儘仕事を続けた。不景気が国全体にひろがっていたけれども、この法律事務所は不動産業務で相当の利益を得ていた。仲間の一法律家が回想するところによると、ゴールドバーグは調停の才能があったので、この業務によく役立った。「アーサーは破産財産の管理をひきうけ、債権者たちにその財産を生かす方法を説得した。彼は再投資計画を練り、新しい基金をもうけ、そして再投資するにあたっては多少の権利を自分自身のためにも獲得しておいたのである」。だが、ゴールドバーグは突然辞職する決意をした。ゴールドバーグ夫人は次のように回想している。「それは不景気の時でしたが、それは素晴しい仕事でした。アーサーの仕事は非常にうまく行っていて、私はサウスサイド

に本当に素晴しいアパートの部屋を持っていました。彼は私を養っていたばかりでなく、私の母親にも仕送りをしていました。ですがアーサーは受戻権のなくなる抵当物件の取扱に時間を費したくはないと決心したのです」。青春時代を除いては、この彼の決意につづく期間だけが、ゴールドバーグが収入面で困った時期であった。

アーサー・ゴールドバーグが一九三三年に個人で法律事務所を開いた時、「それは中々、容易ではなかった」とゴールドバーグ夫人は回想している。彼はシカゴの労働組合の弁護士になったけれども、彼の仕事の多くは助言程度のもので報酬は得られなかった。ちょうどその頃アメリカ国民は不景気からたちなおりはじめていた。そしてゴールドバーグは労働者たちからの依頼を法律の弁護士としてではなく、むしろ市民の義務として引受けたのであった。彼は缶詰工場労働者組合やその他の組合のために社会保障や死者に対する給付金の問題を取扱ったのであって、こういう事件を弁護士として取扱ったのは彼が最初であったのである。彼の最初の仲間の法律家の一人が言うところによると、ゴールドバーグは、「ちょうど医者と同じように法律家は社会に対して義務を持っていると思ってそれを理由に事件を引受けるような人であった」。当時労働組合はもっとも初期の組織過程にあったのであって、こういう労働組合の利益を代表することは容易なことではなかった。われわれは時々そのことを忘れてしまっているが、当時の雰囲気は相当敵対的であった。そして社会的不承認の雰囲気を感じないためには大きな確信が必要であった。ゴールドバーグは頑張った。そして彼に対する依頼者名簿はふえはじめたのである。彼が最初の頃担当した大きな仕事の一つはハースト・コーポレーションの損害賠償請求事件で、アメリカ新聞組合を弁護したことであった。

五　第二次大戦中の活動

一九四二年までにゴールドバーグは、労働問題担当の弁護士としては最高であるという名声を得ていた。彼は当時戦略事務局を設立しつつあったウイリアム・〝ワイルド・ビル〟ドノヴァンから、ワシントンへ招請されたが、そこで骨の折れる仕事を受け持つことになったのである。この仕事は海外における組合抵抗勢力との情報連絡を発達させるために考えられたのである。ゴールドバーグはフランス、ドイツおよび北アフリカに反スパイ行為機関の組織網を設け、これらの国々における海員、河川用船舶運転者、および鉄道乗組員たちの抵抗運動に横の連絡をつけたのである。彼の活動本部はワシントンにあったけれども、仕事の関係上彼は敵の戦線の背後にまで旅し、いくつかの大きな地下組織に攻撃を準備し、ある時などドイツそのものの中にある敵の本拠にまで入りこんで行ったのである。戦略事務局の仕事をはじめた時にゴールドバーグはただの市民であった。だが彼は合衆国陸軍大尉となり、一九四五年に軍務を去った時には少佐であった。それから彼はシカゴにもどり、労働問題担当の法律家として自分で弁護士を開業した。彼はまたジョン・マーシャル法律学校の法律学教授に嘱任され、また、シカゴ大学産業関係学部の講師ともなった。

一九四八年に産業別労働組合会議（ＣＩＯ）と鉄鋼労働者組合の議長をしているフィリップ・マリーが、この二つの労働組織の一般顧問弁護士になって貰おうとゴールドバーグをワシントンへ呼んだ。マリーは組合の中に入り込んで来ている共産主義者との闘争にまきこまれていた。マリーの一般顧問弁護士リー・プレスマンがヘンリー・ウオー

レスの進歩党に参加するため辞職したので、その地位をうめるためにゴールドバーグが呼ばれたのであった。以前にＣＩＯの役員をしていた一人の人は当時の感情を次のように述べている。「それは興味あることであった。我々の多くがＣＩＯに入って来た当初の頃のゴールドバーグをじっと観察していたのを私は覚えている。政策上のあらゆる相違にもかかわらず、フィル・マリーとリー・プレスマンはきわめて密接な関係にあった。リーは影響力と権力ある立場にいた。そして多くの人たちの心にあった疑問は、誰がリーの後継者になるにしても、その人がリーと同じような役割を果すことができるようになるだろうかということであった。ところが驚いたことにはアーサーはその役割を果したばかりではなかった。彼らはアーサーにもっと多くの政策上の責任をも与えたのであった」。

この二重の仕事を引受けたことによって、ゴールドバーグは二つの違った任務を持つことになった。ＣＩＯのために、彼は立法の専門家であらねばならなかったし、また院外運動者でもあらねばならなかった。タフト・ハートレー法がちょうど議会を通過したばかりであった。そしてＣＩＯは議会においてこの新法を撤回させるべく強烈な運動を展開していた。鉄鋼労働者組合のために彼は首席交渉者であらねばならなかった。そしてこのことは法廷における活躍と同じ位の活躍を集団交渉の場においてもしなければならないことを意味したのである。ゴールドバーグが交渉のテーブルにおいて、また、ついには法廷闘争を通じて、鉄鋼労働者に対する恩給獲得のためにたたかった時、彼は右にあげた二つの任務のうちの後者において、彼として初めての大きな勝利を記録したのであった。だが労働組合が四十九日間のストライキをやる以前は、それは勝てなかったのである。ゴールドバーグが主要な戦略家であり交渉者であった時にも鉄鋼労働者組合は三つの大きなストライキにまきこまれた。一九五二年の五九日間、一九五六年の三六日間、および一九五九年の百十六日間の三つのストライキがそれである。

六　労働問題の法律家としての名声

この沢山の闘争を通じて、ゴールドバーグは単に頑強な交渉者としての名声を得たばかりでなく（彼は〝鉄鋼組合の中の鉄鋼〟であるといわれて来た）、異なった意見を和解させることができる調停者でもあるという評判を得たのであった。ゴールドバーグにとっては、このことは何の矛盾も含んでいなかったのである。「立派な労働問題の法律家は、たとえすこしでも立派であるならば、必ず立派な調停者である」と、彼は言っている。

一人の同僚はゴールドバーグの頑強な面を説明して次のように言っている。「組合側に勝つ権利があると信じこんだことについては、アーサーは非常に党派心の強い弁護人である。彼が自分が正しいと思っている時には、彼を一インチでも動かすことはできない」。密接な友情が二人の間にはあったにもかかわらず、一九五二年にゴールドバーグは鉄鋼労働者組合の議長マリーと烈しく争った。マリーは日曜日の労働に対する特別報酬の要求をあきらめようとしていたのである。ゴールドバーグは日曜日の労働に対する特別報酬は、鉄鋼労働者組合が当然要求する権利を持っているものであると強く感じていた。一九五九年に経営者側が労働規則の変更を要求したことに対して、鉄鋼労働者組合が百十六日間のストライキを行なった時も、このストライキ期間を通じてゴールドバーグは鉄石の如く頑固であった。

ゴールドバーグはまた、反対の面を見る才能を持っていた。以前に同僚であった一法律家は述べている。「適度な生産高の維持という観点からみて雇傭者の直面している問題が彼らにとって本当に重要である時には、彼は常にそれらの問題に理解と同情を持っていた。また、持っていただけでなく、それを伝えたのである。そしてこの理由のため

に、反対の立場にあっても道理をわきまえている人たちは、彼と一緒に努力するのを非常に喜んでいる」。

一九五九年にコネコット銅会社でもう一つの鉄鋼労働者組合のストライキが行なわれている最中の交渉で、コネコットの社長チャールズ・コックスが、ストライキ無しの契約についての条文を労使間で決めようと申し出た。組合員たちは強く反対したけれども、ゴールドバーグは合理的な要求であるとしてこれに同意した。この交渉に関係を持った一人の労働問題担当の法律家は「これが地域労働組合の水準での恐ろしい反動契約の実例をつくり出そうとしていることを我々は知っていた」と言っている。「率直に言ってそのことを地域の人たちに知らせるのに一週間かかった。だがこういうことはアーサーに身構える余地を与えるようなものであった。地域の人々が何かにつけて傍観的な気持を持っており、そして経営者側が明確な立場にあるものと判断するならば、彼は真直ぐ相手側を見つめ、そして〝テーブルの向う側に坐っている人たちの言うことは正しい。我々はこういう場所では事実に則し、理性的でなければならない。我々はただ情緒的であることは出来ない〟と言った」とその法律家は語っている。コネコット社のコックスの回想によると、ストライキ廃止条文は三つのＡＦＬ系の組合を除いては、すべての組合に依って承認された。そして「我々はこれら三つの組合にそれを承認させることは出来なかった。私はアーサーに会いに行った。そして彼に、私は工場の門を開くだろう。すれば沢山の流血があるかも知れないと言った。すると彼はこれらの他の組合に働きかけはじめたのである。もしもアーサーがいなかったら、我々はあと六ヶ月も工場を開くことは出来なかっただろう」。

七　団体交渉における直観と洞察

団体交渉は意志の力や公正さをためす機会を提供するばかりではない。交渉者にとってはそれは無いものをあるように見せる見せかけ競争でもある。そしてゴールドバーグは相手側がどうしても譲らざるを得ないものが何であるかを知る名人であると考えられていた。彼は何が獲得できるかについての第六感を持っていると皆から思いこまれていた。一九五五年のユナイテッド・ステイツ・スチール社との交渉の時、ゴールドバーグはピッツバーグのホテルの彼の部屋で経営者の代表と会ったことがある。交渉打ち切りの期限は数時間後に迫っていた。「アーサーは経営者側がキティ（積立金用のつぼ）の中にまだ金を持っているものと考えた」とその場にいた一組合員は回想している。「それで彼は突然頭痛がすると言い出した。そしてすべての人に部屋を出て貰ったのであった。計画どおりストライキがはじめられた。だがそれがはじめられてから未だ二、三時間しか立たない時に、経営者側の代表が入って来た。そして割り当てられていた金額の支払を約束したのであった」。一九五九年の鉄鋼ストライキの最後の数時間が迫った頃、ワシントンの下町の、事務所に使われているある建物の中で交渉しながら、ゴールドバーグは一台の飛行機をナショナル空港に待機させておいた。その飛行機は彼から合図がありさえすればピッツバーグに飛んで、そこで法廷命令発出の手順をふむことになっていた。旧契約によればその法廷命令が発出されれば自動的に組合側の生活費が四セント上昇することを意味することになっていた。ゴールドバーグは新契約による解決を未定のままにしておいて、この法的手続を踏むことを先に延ばしておいたのである。この交渉期間を通じて経営者側の代表者は、その飛行機が既

に飛び立ったかどうか神経質に何回も何回もたずねていたのであった。交渉は午前四時に妥結した。

ゴールドバーグは問題があまりにも複雑化して来た時に問題を明確化し、そして事態の核心に迫って行く巧妙な才能を持っていた。当時の鉄鋼ストライキの交渉で、経営者側と労働者側の両者が、手に何も持たずに平地を一時間に三マイル歩く人が費消するエネルギーの量はどの位かというように、理論的に通常の労働負担量を計算しようとする刺激的な計画について争ったことがあった。これについての議論をゴールドバーグが耳にした時、彼はそれを遮って次のように言った。「そんなことは忘れちまいなさい。汗をはかることなど出来はしません」。

ワシントンにおける経歴のそもそもの最初からゴールドバーグの仕事は、普通の労働問題担当の法律家のする仕事以上のものに及んでいた。ＣＩＯの議長マリーはゴールドバーグが一九四八年に入ってきた直後病気になった。そしてゴールドバーグはＣＩＯの議会関係の責任を持つことになり、ＡＦＬの議長ウイリアム・グリーンと一緒に証言するため、屢々議会に姿を現わした。ゴールドバーグの指導の下にこの組織は「巨大なボールベアリングの上をころがって行くように、なめらかに進行して行った」。

八　ＡＦＬ・ＣＩＯの合同を実現

ゴールドバーグにとってのもっとも顕著な業績は、多分彼がＡＦＬ・ＣＩＯの合同の時に果した役割であろう。彼は最初一九三〇年代の若い学生として、労働運動の中に相対立する派閥の震動を感じた。当時、鉄鋼や自動車産業のような大量生産事業の中に、新しい組合を組織しようとする試みがなされつつあった。歴史の古いアメリカ労働総同

盟の職業別組合は、経営者たちと同じように新組合運動者に抵抗していたのである。これらの職業別組合は、工場規模あるいは産業規模にしたがって組合を組織しようとする努力に対してたたかった。そうこうしているうちに、ジョン・L・ルイスは彼の指揮下にある鉱山労働者連合組合を闘争に立ちあがらせ、産業別組合を設立しようとする努力を支持した。そして新しい労働者連合の基礎であるCIOの設立が準備されはじめたのである。

フィリップ・マリーとAFLの首領ウイリアム・グリーンは、AFLとCIO間のあり得べき同盟関係について探りを入れるために、一九四六年にそれぞれ人を派遣した。だが二人とも、実際行動に踏みきる気持は持っていなかった。AFLはほとんど百に近い組合の混成であった。他方において、三七組合からできているCIOは生々とした組織であって、これをなくすことができるのは合同だけだとマリーは信じていた。この二つの組織の合同が真剣に考えられはじめたのは、右の二人の指導者が一九五二年に死んで、ジョージ・ミーニーとウォルター・ルーサーが彼らの後継者となって後のことであった。その時でも合同への推進力は積極的な確信からきているのではなくて、争っている指導者たちがCIOをバラバラに分裂させることを恐れていたから生じてきていたのである。提携が実際に行なわれる十八ヶ月前のこの時、ゴールドバーグがこの計画を助けたのであった。

鉄鋼労働者組合の一般顧問弁護士として、ゴールドバーグは、ダヴィド・マクドナルド議長のために働いていた。CIOにあっても同じ立場にあって彼はウォルター・ルーサーを代表していた。これら二人の組合指導者は、お互いに敵意を抱いていた。そしてゴールドバーグがこの二つの仕事を両方さばいていることは「素晴しいアクロバット的離れ技」であるとされたのである。マクドナルドの鉄鋼労働者組合と、ルーサーがCIOの線に沿って指揮していた自動車労働者組合は、一緒になってCIOの固い核心となっていた。だがマクドナルドはルーサーの指導下にあるこ

とを面白く思っていなかった。そして一九五四年の初期に、彼の組合をＣＩＯから脱退させようという兆候を現わしたのである。二人の指導者の間に神経戦が行なわれたが、マクドナルドは一九五四年五月二日に華々しい宣伝の真中で鉱山労働者組合のジョン・Ｌ・ルイスおよびチームスターズ組合のデイヴ・ベックと会談することによって、ルーサーを凌駕した。この三人は会談の後、新聞記者団と会ったが、彼らが第三の労働総同盟について考えてはいないとは言わなかったのである。ウォール・ストリート・ジャーナルはこの会談について正確な評論を書き「彼らは共同の目的というよりも、むしろ共同の敵を持っている」と述べた。もしも彼らが合同したならば、ＣＩＯはほとんどバラバラになってしまったであろう。あるいはまた、少なくともＣＩＯとＡＦＬの合同についてのＣＩＯの交渉上の立場は、ほとんど破壊されてしまったであろう。

ゴールドバーグは合同が成功することを望んでいた。彼はマクドナルドと話し合ったのである。一人の組合の同僚はその時のことを次のように述べている。「ちょうどその頃の鉄鋼労組の執行部の会合の時に、アーサーはマクドナルドと朝食を共にした。私はこのことは労働運動の全歴史にとって重大な転換点であったに相違ないと思う。ともかく彼はルイスおよびベックと交渉して袋小路を打開しようとしているのだということを、マクドナルドに確信させたのである。ゴールドバーグはもしもマクドナルドにも同じ希望があるのなら、本当に素晴しいことだと言った。だがゴールドバーグなら何処へでも行って彼らと会えるというものでもなかった。何故ならルイスは年老いてしかも孤立していたからであり、ベックは変り者であったからである。しかもマクドナルドが本当に有効な態度をとろうとするのなら、彼はルイスやベックのような人たちと会談すべきではなかったのである。その代りに彼は、ＣＩＯの中にあって合同賛成を叫ぶべきであった。何故ならば、そうすることが事態の進展への現実的な道であり、そうすればデイ

ヴも一役果たすことができるからである。デイヴはこの役割を買って出た。そしてそれから暫くして行なわれた鉄鋼労働者組合大会において、彼はルーサーに対する烈しい挑戦の態度を捨て、合同の仕事をすすめる機運をつくったのである。」

合同計画にははずみがついて来た。だが、交渉が進展していくと、両者ともまだ重大な留保を希望していることがわかったのである。彼らが直面した最大の障害は、競争相手であるＡＦＬとＣＩＯの組合が、組合員を獲得するために、お互いの陣営に入りこむことを禁止しようとして提案された協約案であった。ミーニーとの会談でルーサーは合同が行なわれる前に、組合が互いに他の陣営をおかすことは、厳重に禁止されるべきであると主張した。ミーニーはＡＦＬの組合が斯様な禁止協定に拘束されることはないと、ルーサーと同じ位強く主張した。ゴールドバーグは調停者となった。彼はルーサーの使者としてミーニーに会ったが、それと同時に、個人としてこの二人の間の意見の相違を取りつくろうことに専心したのであった。

ルーサーを代表している時にも「アーサーはミーニーと非常によい関係を保っていた」と組合の一弁護士は述べている。「ミーニーはアーサーが合同に向って働こうとすることに誠実な関心を持っていることを認めた。またアーサーは両方の側と話し合うことができ、かつ両者の問題を理解することができる男であった」。ゴールドバーグが解決への道を発見した時は、組合員獲得のため互いの陣営をおかしてはならないという問題が、爆発寸前の状態で合同を中止せしめるのに充分なほど危険であり、また、合同の気運を全く殺してしまうほど危険な時であった。ゴールドバーグの計画は、両者の見解に共に注意を払ったものであった。組合員獲得攻勢を厳重に禁止する代りに、彼は新しい連合規約の中に、そういう攻勢に出ないことという原則を折り込むことを提案した。これはルーサーの立場の実質を

とったものであり、またミーニーがＡＦＬの組合に納得させることができるものであった。それから大体三年後の一九五八年に、ＡＦＬ・ＣＩＯの執行部評議員会が最終的な措置をとり、合同された諸組合が規約の中の不攻勢条項に従うよう命令したのであった。

一つの問題が残っていた。そしてそれもまたゴールドバーグの処理を必要としたのであった。今度必要とされたのは言葉で裂目をつなぎ合わすという才能であった。新しい組織は名前を必要としていた。昔からある誇り高きＡＦＬは、その名前が永続することを希望していた。ＣＩＯも若しも必要ならば産業別組合会議の頭文字であるＣＩＯをその名前として保有するような産業別組合の従属機関を保持することによって、自己の存在が認められるべきだと決意していた。だがこの両方の指導者は共に、この部分機関たるべきＣＩＯが別個の権力単位になって合同が名目のみになってしまうことを恐れたのであった。ある朝、ゴールドバーグは食事をとっている時、最近合同した一つの朝刊を読んでいた。彼は受話機をとりあげ友人に電話をかけた。「それでね。ワシントンポスト・アンド・タイムズヘラルドという新聞がある位だから、ＡＦＬアンドＣＩＯと言ってどこが悪いだろうか」と彼は言った。ある同僚はこれに次のような後書をつけている。「新連合の名前はＡＦＬ・ＣＩＯとなるだろうということが発表された後、ワシントンの新聞社の誰かがアーサーに〝これは恐しくややこしい名前ではないかね〟と言ったが、それに対してアーサーは〝あなたはワシントンポスト・アンド・タイムズヘラルドの編集者ですか〟と答えたのです。その編集者がどんな顔をして引きさがって行ったか想像して下さい。」

九　労働界の恐喝事件

労働界の恐喝事件は合同交渉においてとりあげられたもっとも白熱した問題の一つであった。組合の指導者たちは恐喝が行なわれていることを知っていた。だがこれらの指導者たちが、腐敗がどんなに深く労働運動にしみこんでいるかをはっきりと知ったのは、それから七年後のことであって、上院のマクレラン調査委員会の作業を通じてであった。一九五三年ＡＦＬのジョージ・ミーニー議長は、セントルイスで開かれたＡＦＬの大会で、当時ＡＦＬの傘下にあった国際波止場人足組合を強制的にＡＦＬから除名してしまった。ルーサーは新しく合同した組織が、この攻勢をさらに続けるべきであると主張した。後にゴールドバーグは『統合労働組織ＡＦＬ・ＣＩＯ』という彼の著書の中で次のように述べている。「ＣＩＯと関係ある二、三の地方労働組合は時々恐喝分子の支配下におかれることがあった。これに対してＡＦＬの方は恐喝分子に支配される地方労働組合に関して重大な問題をかかえていたばかりでなく、色々な時期に他の国際的な諸組合までが重大な恐喝勢力の脅威に直面していたのであった。」

合同委員会は腐敗勢力に対するたたかいを新連合規約の重要な項目にすることに同意した。ゴールドバーグは腐敗を判定し得る基準を定義する仕事を引き受けた。すぐれた法律文書であるという理由で公表された一連の文書の中で、この労働問題担当の弁護士は、恐喝行為の禁止を述べ、組合指導者の実践倫理則を叙述しているのである。組合指導者たちのための正しい行為規範を叙述したこの実践倫理規則は、腐敗に対するＡＦＬ・ＣＩＯ自身の内部闘争の基礎となったのである。

デイヴ・ベックにより率いられ、後にジェームズ・R・ホッファによって指揮されることとなった国際チームスターズ組合は、AFL・CIOの主要目標であった。もっともパン製造職人組合、繊維労働者組合、宝石職工組合およびその他の小さな労働組合内の腐敗行為もまた、知られていたことは知られていたのである。だが、ひとたび反腐敗運動計画がうごき出すと、それは幾人かのAFL・CIO役員の間に強い反対をまきおこした。これらの役員たちは組合員自身の家族の者たちに直接影響がおよんでいくことに反対したのである。役員たちの中にはあからさまに寛大な態度をとった方がいいとする者もいたし、また、ほかの役員たちの中にはこういう問題はAFL・CIO内部で、めだたないように取扱った方がいいとする者がいたのである。だが多数の役員たちにとっては腐敗勢力とはっきり訣別する時が来ていたのであった。ゴールドバーグはこの多数の役員たちの一人であった。

だがこの多数派グループでさえも、AFL・CIOから個々の組合を除名するという痛々しい手続を避けたいと希望していた。規則に違反した組合がこの連合の実践倫理五人委員会に提訴されると訴追者ゴールドバーグが証拠を提出した。組合の弁護士はこの委員会の一般的な態度を次のように説明している。「これは訴追のための訴追ではまったくなかった。実際反組合的な資料を提出する場合でも目的は組合そのものを有罪にすることにあるのではなくて、その資料を記録にとどめておこうとすることにあったのである。裁判所における訴訟手続の基礎理念は、訴訟に勝つために相手当事者を敗訴せしめる判決を得ようとすることにあるのであるが、この委員会の態度はそういうものではなかった」。証拠が提出されるにつれて違反者がこの連合を去って行くことが望まれていたのである。だがもしも彼らがそのことを拒否するならばその問責はAFL・CIOの大会においてなされる。このたびの件は一九五七年アトランティックシティにおける満員の大会に提訴されたのであった。こうして被告は順番に演壇にのぼったが、彼らの

除名反対の抗弁は成功しなかったのである。労働運動の精神をはっきりと表に出しているこういう場面は今日でも、その件に関係した多くの人たちの心の中に生々と想い出されるのである。

チームスターズ組合は最初に除名された。だがそのほかの組合の追放がはじまる前にパン製造職人組合とその議長であるジェームズ・クロスをどのように扱うかについて、ミーニーとゴールドバーグの間に意見の衝突が起きてきた。クロスは組合を運営するにあたっていかがわしい倫理観を抱くようになっていたし、また財政的処理の仕方もあやしげなものであった。チームスターズに対する行動についてはミーニーとゴールドバーグの意見は一致していた。だがジェームズ・クロスの場合には、除名という処罰は不必要に厳格なものであろうとゴールドバーグは思ったのである。「アーサーは黒と白をはっきり区別するだけではなく、それを越えた見方をすることが出来た」と一人の友人は批評している。ゴールドバーグはクロスの地位を下げて彼を監督することができるように、組合の地方事務所の役員にしてしまえばいいと提案した。ミーニーにとってはこの組合の腐敗をおおいかくすものは何もないと思われた。かくしてクロスとその組合は除名されたのである。これはゴールドバーグの慎重な行動が敗北を喫したほんの僅かな例の一つである。

十　マクレラン委員会との関係

ＡＦＬ・ＣＩＯが、自分の屋内をきれいにしようと努力している最中、ゴールドバーグは、マクレラン委員会特にケネディ兄弟と、密接に協力して仕事をしていた。彼はこの委員会の聴聞会で明らかにされた証拠をＡＦＬ・ＣＩＯ

の実践倫理委員会での彼の仕事に利用したが、そのお返しに議事堂におけるマクレランの調査活動を援助した。ロバート・ケネディは彼の著書『The Enemy Within』の中で、マクレラン委員会が活動を始めた直後に行なわれた会合について述べている。「ジョージ・ミーニーとAFL・CIO内の彼の仲間は我々の委員会が暴露した腐敗勢力の存在についてこの国の他の誰よりも苛立っていた。我々の仕事がはじめられた直後、私は上院議員会館の食堂のがやがやした一偶で、ミーニー氏およびアーサー・ゴールドバーグと昼食を共にした……こういう昼食の機会をつくったのは、ミーニー氏に対して我々の直面している巨大な仕事を説明しようとするためであり、また我々の仕事によって彼にどういう問題が生ずるかを理解しようとするためであった。」

「その会合においても、またその他の時においても、彼が我々に求めたすべてのことは、我々が公正であって欲しいということであった」とケネディはさらに言っている。「その後、何回も彼は、我々の委員会がやっていることに賛成が出来ず、そしてそういう意味の言葉を述べた。我々に間違いがあったことは確かである。だが、私の判断によると、彼の批評は必ずしも正しくはなかったし、事実に基づいてもいなかった。」。ぶっきらぼうな話しかたをするミーニーは、三年間の調査期間中、何回も何回も、委員会の活動範囲が不必要にひろがったと彼が感じたことについて公然と怒りの表情をあらわし、ある時などは「これが我々の友人のすることなのか」とどなったのである。調停官として活動していたゴールドバーグはミーニーとジョン・ケネディが公然と仲違いすることを、一度ならずふせいだ。ゴールドバーグはこの組合の指導者にマサチューセッツの上院議員は労働者に対して公正であることを説得したのであった。その後のケネディの大統領選挙戦においてゴールドバーグは一本化した組合の支持を獲得するために大きな役割を果したのであった。ボブ・ケネディは彼の著書の中で、ゴールドバーグを「賢明で」、「巧妙な」弁護士である

と述べている。そしてケネディが全国向けテレビ放送でした発言に関してホファから告訴された時、彼はゴールドバーグを担当弁護士として雇ったのであった。この訴訟は却下された。

十一　夫人素描—考古学的絵画—

ゴールドバーグ夫人もまた、夫と共に労働運動に関心をもっていた。彼らがシカゴに住んでいた当時、彼女はシカゴ大学で労働問題を勉強した。また、ウイスコンシン夏期大学で、労働者のための学級に出席したこともある。彼女はまた、シカゴの婦人労働組合連盟の積極的な一員であった。一友人の回想によると、「その美術的才能によって彼女は、連盟の声明書やパンフレットに画をかいて、その単調さを救ったのであった」。

妻が絵画について確かな才能を持っていることに、ゴールドバーグは非常な満足を感じていた。彼女の作品はニューヨークやワシントンの画廊に展示され、著名な批評家たちから認められた。そして彼女は五回も個展を開いたことがある。彼女はワシントンで他の三人の女性と画廊を経営していて、彼女の時間の非常に多くがそこで費された。抽象派の画家であるゴールドバーグ夫人は、自分の技巧について「詩を絵画化しようとしているのです。絵画と言葉とを融合させようとしているのです」と述べている。彼女の絵の多くは労働を主題にしたものであり、また、いくつかの絵は夫や彼女にとっての個人的な意味を持っていたのである。

ゴールドバーグが特に気に入っている絵がいくつかあって、それらは労働省の彼の事務所に飾られていた。それらのうちの一つは労働組合の大会をえがいたものである。「この絵がかかれたのはあの合同が行なわれるずっと以前の

ことである。それは一九四九年の恩給問題についての大ストライキが解決した後にかかれた近代的抽象画である。実際、ミセス・ゴールドバーグはクリーヴランドにおけるＣＩＯの大会に出席していた時にこの画をかいたのであって、この大会でマリー氏が、私が鉄鋼ストの解決について報告を行なう旨を、発表したのであった。私はこれが素晴しい絵画であると思う。それはその地の展示会で飾られたし、またその他いくつかの展示会にも出品された。だが私はこの作品に非常に感傷的な愛着を感ずるのである。」とゴールドバーグはこの画について語っている。

もう一つのは「壁」と呼ばれている絵である。ゴールドバーグにとって、「それは古代の絵のように見えた」のである。「もしもあなたがさがって見るならば、顔が見えて来るだろう。それは東洋の顔だ。また過去の顔だ。私はいつも考古学が好きだった。私に再生の機会が与えられるならば、私は考古学者になりたいと私はいつも言って来た。考古学は人生における偉大な仕事であると私は考えているのだ。この学問は、探偵小説的な要素と捜査の要素をすべて持っている。法律家もまた証拠を捜す時にそういうことをする。あなたは過去を堀り返すのだ。それでこのことは何時も私にとって魅力であった。そしてこの絵はまったくちょっとした考古学なのである。」

十二　大統領直属の労使諮問委員会

アーサー・ゴールドバーグの労働長官任命の諾否を討議する上院労働委員会の聴聞会の時ゴールドバーグは、バリー・ゴールドウオーター上院議員に対して「この高い名誉を与えられた時、個人として私が持っていた見解が消えうせてしまったといえば、私はまったく率直ではないことになる」と言った。だがそれから彼は次のように言ったし、

またこの言葉を何回も何回も繰返し述べて来ているのである。すなわち彼はこう言ったのだ。「労働省は我々の政府の省である。それは、いずれかの特別の利害を同じくするグループが、私的に支配権を握る場所ではない……それはこの省の仕事に重大な関心を持っているあらゆるグループの利益を、公正にかつ力強く代表することを意図しているのである。」

ゴールドバーグが労働者の味方であるということを自ら否認しても、大部分の実業家たちの頭に残る記憶、すなわち彼は組合の仕事を効果的に処理して来たという記憶を消し去りはしなかったのである。まったく、労働組合の顧問弁護士として彼が成功して来たということは、彼が労働者側、経営者側両者のおだやかな態度の必要を強調しつつ、すなわち「彼の口の両側からしゃべるという論法」によりつつ、強力な労働者独占体制の確立を彼が援助して来たという非難を生ぜしめたのである。多くの実業人たちが、心の底で、ゴールドバーグが経営者と労働者の両者のためにつくす政治家としての役割を、急に果すことができるようになるかどうかについて疑問を抱いたのは、ゴールドバーグが労働界のスポークスマンとして成功し、かつ実力を持っていたという事実そのものによるのであった。「私は労働組合の指導者たちに歴史的に不信感を抱いている。特にゴールドバーグやルーサーのように頭の切れる人たちに対してはそうである」と一人の批評家は不平を述べている。だが、奇妙なことに彼を懐疑的に見ている人たちも含めて実業界の相当大勢の人たちが、アイゼンハワー政権の労働長官として多くの労働者側の主張を支持したジェームズ・ミッチェルよりも、ゴールドバーグの方を好んだのであった。「ミッチェルは羊の皮を着た狼であった。だが、すくなくともゴールドバーグは狼の皮を着た狼である」というのが、これらの人たちの論理であった。

すべての実業家がゴールドバーグを疑わしく思っていた訳ではない。コンチネンタル缶株式会社のルシアス・クレ

イ将軍、コネコットのチャールズ・コックス、およびカイザー鋼鉄株式会社のエドガ・J・カイザーなどの人たちを含めて、著名な実業家たちの堅い核心をなす人たちは、ゴールドバーグの公正な精神を公然と賞讃していたのである。交渉のテーブルをはさんで屢々ゴールドバーグに会ったことのあるカイザーは「彼は労働者側をひいきにしているように見られるのが嫌で、交渉の場でぐっと後ろへそりかえるような人物である」と述べている。ゴールドバーグにとっての問題は、経営者全般に対して、経営者と労働者は利益をわかちあうものであるということを、確信させることであった。そして彼は内閣に入った瞬間からこの問題のために働いて来ているのである。

組合側の交渉者ではあったが、それまでの数年間彼は、労働者と経営者はさらに離ればなれになって来ているし、両者のにがにがしい関係がその度をましていることは両者間の意志疎通をより難しくしていることについて、両者に警告を発して来た。ゴールドバーグの提案に従ってケネディ大統領は、大統領直属の労使諮問委員会をつくった。これによってゴールドバーグはこの委員会を通じて雇傭者と組合指導者との間の意見の相違を調整し、オートメーションや対外競争や絶えず上昇する賃金と価格の水準などの諸問題に対して、両者が共通の態度をとることが可能であることを明らかにする機会を、持つことができたのであった。ゴールドバーグはこのことを、閣内における彼のもっとも重要な仕事であったと考えている。

労働省は一九一三年に内閣の一省としての地位を得た。そしてその目的は「合衆国の賃金労働者の福祉を促進し発達させること。彼らの労働条件を改善すること。そして彼らが有利な仕事を得られる機会を増進すること」であった。ゴールドバーグは労働省に課せられたこの任務をできるだけひろく解釈しようとしたのである。過去において労働省は、再婚の家に迎えられた継子のようなものであってその地位は、他のほとんどすべての政府機関よりも低かっ

た。だがゴールドバーグは、その低さをそのままにしてはおかなかったのである。彼はアラン・アダムズのいうとおり、「契約のテーブルにおける騎士」であった。